

隔離・差別政策と闘う

私たちの「美しい国へ」

□2

山本のケータイが鳴り続けた。「(持病のうつ病で)調子が悪いと切っちゃうんだけど」と苦笑いしながらも、電話の口調は穏やかだ。「病者」の仲間たちから、あらゆる相談がくる。

「強制入院させられた」「役所にヘルパーを頼んだのに、窓口が申請書をくれない」から「マヨネーズで本当に太るの？」まで。彼女は現在、精神障害者者集団(会員約五百人)の

「窓口係」、つまりは事務局長を務める。「病」者集団は一九七四年、政府の保安処分導入案に反対し、結成された。数ある精神障害者団体の中では「コワモテ」のイメージがある。

でもね、と山本がささぎつつ、「これに対してはさすがに自民党系の障害者団体まで反対。かつてない共同行動なの」と続けた。

「これ」というのは、こ

とし四月に厚生労働省が施行した「精神障害者退院支援施設」制度の導入だ。山



やまもと・まり ベンネーム・長野英子。1953年4月生まれ。17歳のとき、うつ病で初めて入院。高校を中退後、高卒認定試験(大検)で大学に進学し、卒業。20代後半で全国「精神障害者」と出会い、現在「窓口係」。訳書に「精神医療」「精神医療ユーザーのめざすもの」など。一男一女の母。

全国「精神障害者」者集団の「窓口係」 山本真理さん

退院支援施設 共生に逆行の

本はいま、制度の撤回を訴えている。日本は世界に類を見ない「精神病院大国」だ。入院患者は三十二万人。平均入院期間も約三百五十日と突出しており、十年以上が全体の約三割を占める。

深刻なのは入院の必要がなくなっても社会に戻れず、病院にとどまる「社会的入院」患者の多さだ。その数、七万七千人(同省発表)。欧米諸国は六〇年代から「病院から地域へ」と取り組んだ。だが、日本は「隔離のための民間病院増設」に奔走。そのつけ

政府は二〇〇二年、「新障害者基本計画」(〇三―二年度)を策定し、地域「日本精神科病院協会(日精協)」。関係者の一人は

地域の受け皿縮小、選択肢奪われ

どの地方都市に行っても中心市街地の空洞化が著しい。いわゆるシャッター通りだ。それならば、障害者が集える作業所やグループホームなどの施設に転用してほしいと思う。しかし、精神障害者などの施設は、決まって人目のつかない所ばかり。健康者との共生とはほど遠い。発想の転換が必要だ。(吉)

デスクメモ

三月以上入院されると入院費が次第に下がり、それが経営を圧迫する。退院支援施設の設置は公費で賄え、デイケアなどのサービスマン分は稼ぎになる。新規の入院患者も増やせる」とい

厚生労働省は障害者団体との交渉で、退院支援施設は「地域に戻る多様な選択肢の一つ」と繰り返した。しかし、山本は否定する。

「地域で福祉の実務を担う市町村は一面倒だから病院に押し込んでほしい」とい

「空き部屋が埋まる」と考える。選択肢は彼らにとってのもの。地域での受け皿整備の予算を退院支援施設に回されてる当事者にとって選択肢はない

閉じこめ目的 当事者無視

医療の現場からも疑問の声が上がっている。地域に開かれた精神科医療に取り組む多摩おおば病院(東京

観察法、それ以外の長期入

山本は「危ない」とみなされた精神障害者は医療

しかし、地域での共生が成功したケースも生まれてきた。青森市や鳥取県米子市では、支援団体がさびれた商店街に拠点を設け、当事者らが高齢者の品を宅配する仕事を始め、好評だ。

ハンセン病での過ち、政府は再び…

この、一部の市民から「うちだって、そんなに風呂に入れない。せいたくを言うな」と反発を食らった

「私が訪れたある病院は一階が開放、地下が閉鎖病棟。開放病棟の若い女性入院患者が、閉鎖病棟の話を別の患者から聞いて「下を見学するツアー」でも組もうかしら」と笑っていた。自分も同じ精神障害者だという共感はあるがなかった

一昨年、アルコール依存症での入院体験を描いた漫画家の作品が評判を呼んだ。偏見は薄れてきたようにも見える。だが、山本は逆に精神障害者の間に「私はまし」という新たな分断が生じていると感ずる。

国連は昨年十二月、障害者自らが初めて作成に加わった「障害者人権条約」を採択した。「病」者集団は日本でも唯一、作成に携わった。山本は日本政府の署名と批准に望みを託す。

共生に向かう国際的な流れを見てきた山本、山本の目には退院支援施設の逆行ぶりがある。この国の時代錯誤を象徴しているように映る。

「この制度が本格稼働すれば、長期入院患者は退院支援施設に移され、数年後に再び新規の患者として病棟に移される。それが延々と繰り返されるだろう。まるでハンセン病の隔離施設と同じ。政府は同じ過ちを再び犯そうとしている」

(敬称略、田原拓治)



中央合同庁舎第5号館
内閣府(防災担当)
厚生労働省
社会保険庁

「退院支援施設」制度導入を強行した厚生労働省―東京・霞が関で

「退院支援施設」導入の背景にも、そんな偏見が影を落とす。「ある地域で当事者施設をつくらうとしたら、そこに通う人は全員、髪を黄色に染めると住民から要求された」ともあった

「退院支援施設」制度導入を強行した厚生労働省―東京・霞が関で



障害者が地域

「精神病院大国」の現状 都会はより深刻に